

平成 21 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

国際柔道連盟試合審判規定の改正が
競技内容に及ぼす影響について

所属 スポーツ科学領域 コーチング科学分野

氏名 田村 昌大

論文指導教員 菅波盛雄 准教授

合格年月日 平成 22 年 3 月 / 日

論文審査員 主査 中村 亮

副査 廣津信義

副査 菅波盛雄

目次

第1章 緒言.....	1
第2章 文献考証.....	5
第1節 近年の世界柔道.....	5
第2節 IJF 審判規定改正の変遷.....	6
第3節 柔道競技分析小史.....	7
第4節 他競技における審判規定改正前後の競技分析.....	7
第5節 先行研究のまとめ.....	8
第3章 研究目的.....	10
第4章 研究方法.....	11
第1節 対象試合.....	11
第2節 分析者.....	11
第3節 競技分析シートの作成.....	11
第4節 対象項目.....	11
第5節 分析方法.....	13
第6節 統計分析.....	13
第5章 研究結果.....	14
第1節 大会概要及びポイント取得技に関する項目.....	14
第2節 投技の施技に関する項目.....	15
第3節 投技の組み手に関する項目.....	16
第4節 投技の相手に関する項目.....	17
第5節 固技に関する項目.....	17

第6章 考察.....	18
第1節 IJF 審判規定が及ぼした影響.....	18
第2節 軽量群と重量群の競技特性.....	22
第3節 今後の柔道競技及びコーチング現場における方策.....	25
第7章 結論.....	28
第8章 要約.....	30
謝辞.....	31
参考文献.....	32
英文要約.....	38

表
資料

第1章 緒言

日本伝講道館柔道(以下、柔道と略す)は、1882年に嘉納治五郎により創始された我が国発祥のスポーツ競技である。1956年、東京において、第一回世界柔道選手権大会(以下、世界選手権とする)が開催され、1964年、オリンピック(以下、五輪と略す)東京大会において正式種目として施行されて以降、世界各国で普及・発展、加えて強化がなされてきた。2007年9月時点では、199の国と地域が国際柔道連盟(以下、IJFと略す)に加盟しており¹⁶⁾⁴³⁾、国際連合加盟国にほぼ等しい国が参加している⁷⁰⁾。また、2008年北京五輪においても92の国と地域の選手が出場するに至っている。

さて、いまや柔道は「JUDO」¹²⁾といった英字で表現されているまでに世界各国に広まり⁶⁵⁾⁶⁶⁾、普及発展の結果、様々な柔道スタイルが出現している⁴⁸⁾。

元来、柔道は、組み手においては釣り手を「襟」、引き手を「袖」といった基本組み手²⁴⁾の状態より技を施すことが理想的⁷⁹⁾とされている。しかし、近年、諸外国においては、「立技から寝技へと連絡し変化する自由格技であり、投技、抑技、絞技、関節技を連鎖的に力一杯施し得るところに特色がある」というスタイルである柔道の技術・戦術がみられるようになった²⁴⁾。

各国の柔道の競技スタイルを分類する上で、中村³²⁾は日本人の柔道スタイルを「東アジア系」と分類している。韓国や中国も同様のグループに分類され、「一本」の割合が高く、「内股」・「背負投」・「釣込腰」といった技において勝利ポイントや決まり技に使う傾向がある。一方で、2008年の北京五輪・男子柔道競技における活躍が目立ったウズベキスタン・カザフスタン・タジキスタン・アゼルバイジャン・グルジア・ウクライナなどいわゆる「旧ソ連系」に分類される。これら国々の競技者は、主として「肩車」などの技を用いて台頭してきた。中村³²⁾が分析した結果、北京五輪・男子柔道競技において、最も一本勝ちの多かった技がこの「肩車」であり、2007年リオデジャネイロ世界選手権においてもポイント獲得技の中でも最も多かった³³⁾。従来の「肩車」は、姿勢が良好でお互いに引き手と釣り手を組んだ状況から技を繰り出すようなスタイルで施されていたが、低く構えて前屈した姿勢⁵⁵⁾より引き手や釣り手の持つ位置を気にすることなく、あるいは厳しい組み手争いの中で片手組みの状態から技を仕掛ける⁴⁰⁾⁶⁵⁾⁸¹⁾、というようなスタイルが一般化されるようになった。

また、「組まない柔道、手で足を狙うだけの柔道、捨身技を連発する柔道が横行」⁸⁰⁾

という報告もあり、理想的とされる柔道スタイル⁷⁹⁾からの乖離が危惧されている。このような柔道スタイルの変容には、審判規定の改訂、改正が大きく影響しているといった指摘があり⁴⁴⁾、審判規定の改正により世界柔道の動向が変わるとも考えられる。

現在の国際試合では、国際柔道連盟試合審判規定（以下、IJF 審判規定と略す）を用いており、1967年の制定以降、数年毎にIJF 審判規定の改訂がなされているものの、「整備が不十分」⁶⁵⁾「審判規定の内容やその運用の仕方を改める必要がある」⁴⁴⁾などとも言及されている。

これまでの柔道競技の発展に伴うIJF 審判規定の改正は、より詳細な技術や反則を勝敗決定要因としてポイント累積化する傾向が強かった。近年の柔道は、その競技内容の傾向や各国際大会の様相から「点取り柔道」⁶⁶⁾と揶揄されている。さらに、各国固有の民族格闘技（レスリング、サンボ、チタオバ、モンゴル相撲等）と融合²¹⁾⁵⁵⁾⁸¹⁾し、新しい技術・戦術を生み出しており、「レスリングに近くなっている」といった指摘⁷⁹⁾もあり、「タックル柔道」²⁹⁾や「ネガティブ柔道」³⁵⁾とも表現されることは、積極的攻撃を繰り返し、一本勝ちを目指す「ダイナミック柔道」¹³⁾³⁴⁾³⁵⁾を推進するIJFの思惑とは逆行している。

こうした状況下、IJFはビゼール会長の指導のもと、2008年10月にIJF 審判規定の改正⁵¹⁾をおこなった。2008年10月にタイ・バンコクにおけるIJF 臨時総会において採択されたIJF 審判規定の改正点⁵¹⁾は以下のとおりである。なお、今回の改正は2009年1月1日より正式に施行された。

(1) 「効果」の廃止

「効果」を廃止し、優勢勝ちの判定基準は「有効」以上とし、「有効」以上の得点差が無い場合には、ゴールデンスコアで勝敗を決する。現状の「効果」に相当する技の評価はしない。また、「抑え込み」の場合においても15秒未満は得点とはしない。

(2) 罰則の基準（「指導1」の場合は、得点としない。）

「効果」の廃止に伴い、1回目の「指導」は得点とはせず、2回目の「指導」で相手に「有効」相当の得点が与えられる。但し、1回目の「指導」においても従来と同様に発声し、掲示板には表示する。

(3) ゴールデンスコア（延長戦）

試合時間は3分間とし、片方が「有効」を得た場合、または片方の試合者に2回目の「指導」が与えられた時点で勝敗が決する。3分間で得点差が無い場合は、旗判定で勝敗を決する。

(4) 場内外の判断基準

立ち姿勢において、どちらかの試合者の一部でも場内にある場合は試合を継続するが、双方の試合者の全身が場外に出た場合は「待て」とする。

(5) 相手のズボンを直接握ること

立ち姿勢における攻撃・防御の中で、直接ズボンを握った場合は、「待て」として「指導」が与えられる。但し、ズボンを握ると同時に施した大内刈や相手の脚を抱えて施す双手刈、朽木倒、掬投などを掛けることは認められる。

(6) 次の禁止事項を犯した場合は、より厳格に対処する。

①腰を曲げ、頭を下げた低い姿勢を取り続けること。

②偽装的な攻撃をすること（掛け逃げ）

③組み手を嫌うこと（早めに双方に「指導」を与える）。また、自分の襟を押さえたり、ただ相手の後襟を上から押さえ続けて相手に組ませないようにすること。

(7) 敗者復活戦は、ベスト8に進出した選手のみが対象となる。

同時に、ランキング制の導入やグランドスラム及びグランプリ大会と呼ばれる格付けされた国際試合が開催され、上位入賞者への賞金制度が採用されるようになった。

今回の新ルール最大の目標として、ビゼールは「ダイナミックな柔道を目指し、一本を追求する伝統的な柔道を立て直していく」⁷²⁾と述べている。全日本柔道連盟の意見としても、「一本へのこだわりはわれわれと一致している」⁴²⁾としており、見解は一致している。また、「姿勢良く組み合う、いわゆる自然体の正しい柔道」⁵⁵⁾というような柔道の本質及び日本柔道の理念とも合致している点があるといえる。

今回の審判規定改正の背景にはお互い組み合わずに、直接脚を取りにくる攻撃や極端な前傾姿勢からの施技⁵⁵⁾、更には体を捨てるなどの偽装的な技を繰り出す選手に対する抑止策¹⁶⁾と考えられる。また、場内外の判定基準では、「待て」の回数を減少させることで、試合を中断させずに攻防を継続させるねらいが感じ取られる。

ルールが改正されれば、それに伴いその競技の運動技術は変化する⁵⁹⁾と考えられる。

審判規定の変更は競技の勝敗に直接影響し、競技内容も大幅に変化するものが多い⁴³⁾ため、今回の IJF 審判規定の改正が、競技内容にどのような影響を及ぼすのか注目すべき点である。

そこで、本研究では、IJF 審判規定の改正前後の国際試合の競技内容を比較・分析し、競技内容や戦術がルール改正の意図に適したものであったのか、その影響を検討した。

第2章 文献考証

第1節 近年の世界柔道

近年の柔道競技においては、様々な報告がなされている。特に、日本人選手の戦い方以上に、外国人選手の戦術や印象、さらには世界柔道の競技傾向についての報告は多い。川口は¹⁵⁾は「柔道とレスリングの違いがなくなってきた」と指摘し、「決まり技の上位は肩車、朽木倒、掬投、谷落、隅返など足をとったり、もぐったりする技がほとんどであり、グルジアスタイルのレスリング系」³³⁾という論評、さらに、「レスリングやモンゴル相撲のようなスタイル」⁷⁹⁾といった報告もみられる。

柔道における試合で対象となる技術とは、投技と固技である²⁴⁾⁵⁰⁾。また、ケルンによると「戦術とは編成の術」¹¹⁾としていることから、柔道においては技術に至るまでの過程、すなわち、組み手である。これらのことが、近年において、従来の考えられてきた柔道競技とは技術や戦術に違いが出てきていることが推察できる。

競技傾向については、試合審判規定改正前の報告では、「審判員があまり試合に介入しない傾向が強くなり、罰則をなかなか取らなくなってきた。」¹³⁾「特に審判が偽装攻撃と場外の反則をほとんど取らなかった。」⁴⁷⁾「試合中、組み合わない時間、レスリングのような離れた位置からの下半身への攻撃は大会を追う毎に加速している」⁴¹⁾などと報告されている。現在の審判規定に適応した技術として、双手刈や朽木倒等の奇襲技⁴⁵⁾や国際大会の決まり技が内股・背負投・大外刈などから朽木倒・肩車・双手刈・隅返などの技に変わってきている⁴⁶⁾⁴⁷⁾⁸¹⁾という報告もみられ、「西洋のスポーツ化柔道」¹³⁾とも表現・揶揄されるようになってきた。また、大滝ら⁴⁸⁾は「柔道においても昨今国際化が著しくなってきた世界で柔道に定着してきた今日、いろいろなスタイルの柔道が現われてきている。体力を中心とした力による柔道や技を重視しない戦術、戦法のための柔道など一時的に勝つための柔道が多くなっている。」と分析している。

一方で、柔道の本質を考えるとといった点において、藪根ら⁷¹⁾は「正しい柔道で目指すべきことは、単に試合に勝つということではなくて、見事な「一本」を積み重ねていくことである。」としている。また、投技においては、「引き手と釣り手は緻密に関係し合って成果を生み出しているのであり、片方のみを重要視することはできない。引き手が重要か、釣り手が重要かという問題ではなく、両者が合目的に関係し合っ

いるかどうかが重要なのである。」という「一本」を目指すことはもちろん、組み手においても釣り手と引き手の両方を持ち、その意味を理解することの重要性を論じている。

近年の柔道における競技傾向は、本来の柔道の目的である「一本」を取得するための技術や戦術を熟考して、追求していることは言い難い。いかにして、投技・固技による取得ポイント以外の反則ポイントも活用して勝利を手にするかという考えや勝利するためなら手段を選ばない、勝利至上主義的な傾向が強くなっていることが考えられる。

第2節 IJF 審判規定改正の変遷

1951年にIJFが発足して以来、IJF審判規定の改正は幾度となく繰り返されてきた¹³⁾³⁵⁾。IJF発足以後は講道館柔道試合審判規定という、現在においても国内試合の一部で使用されているものが採用されていた⁴⁴⁾。しかしながら、1967年にIJF審判規定を制定して以来、競技柔道化の発展のための改正が行われてきた。最初に改正された年は1971年⁴⁴⁾であり、その後10数回改正し、今日に至った。

1990年代から近年にかけてのIJF審判規定の改正は、「教育的指導」の廃止や5秒ルールの適用⁴⁴⁾による競技活動の規定や規則の変更で1997年のブルー柔道着導入や抑込時間の変更³⁵⁾⁶⁶⁾⁸⁶⁾⁸⁷⁾、新階級の7階級の制定、組み手における反則適用や1997年抑え込み時間の変更や蟹挟や体をすてての脇固の反則、2003年には5分間の試合で行うゴールデンスコア方式(5分間の試合では勝敗が決しなかった場合に延長戦を行う方式。以下GSと略す)の採用³⁴⁾⁸⁶⁾や注意や警告のポイントを指導に一元化等⁷⁰⁾の改正が行われてきた。その背景には、オリンピック種目を継続させるために競技そのものの魅力を高めるための工夫や、観客により分かりやすく観戦してもらうためのテレビ放映に伴う「見やすさ」の改善が考えられる。

今回の審判規定改正に至る前までは、技の判定基準は「効果」を採り入れることで、判定基準を細分化⁴⁴⁾していた。「効果」ポイントは、1973年、ローザンヌ総会で改正⁴⁴⁾がなされた際に「有効」と同時に導入された。それまでは「効果」の存在・概念自体の存在はなく、「有効」は「技ありに近い技」²⁵⁾⁴⁴⁾として定義づけられていた。「効果」ポイントの廃止は1973年に「効果」が採用されてから約36年が経過しており、技ポイントの細分化が進んできた。

しかしながら、今回は「効果」を廃止することで「柔道らしさとしての伝統保持」¹³⁾という事由の下、IJF 会長の主導によって改正され、近代柔道において大きな審判規定の改正及び原点回帰の機会になったといえる。

第3節 柔道競技分析小史

柔道における競技分析による研究は、様々な角度から報告されている。国際大会を競技分析した研究は、施技数やポイント取得技の順位や組み手内容の報告⁶⁾²⁵⁾⁶¹⁾⁶⁷⁾がある。僅差判定の研究において、青戸ら²⁾は、「悪い印象動作を行う時間帯は2-4分の間で有意である」という報告や横田ら⁷⁶⁾の「効果のポイントに近い状態で投げられたものが試合を決定する要素となる」という報告がある。

廣瀬ら⁷⁸⁾は、投技戦術行動による競技分析的研究を男女比較し、技効力も踏まえた報告をしている。また、特定の国際大会や階級・強豪選手に限局した競技分析¹⁾²⁸⁾³¹⁾⁵⁴⁾や菅波らの特定国の敗因分析を行った研究⁵⁵⁾もみられる。

国内試合における競技分析研究は、体重無差別にて行われる全日本柔道選手権の競技分析⁶⁸⁾⁶⁹⁾がある。さらに段位差や組み方別、体力差(身長・ローレル指数)²²⁾⁶²⁾⁶³⁾⁶⁴⁾⁷⁴⁾による内容や、決まり技による競技分析報告⁶¹⁾、試合勝者の特徴を研究したものについて、真柄¹⁹⁾は、勝者の特徴を研究した事例について「技を多く仕掛けたものは勝利に対して1%で有意」、という報告を行った。しかし、現在の競技分析研究の主流は、五輪大会や世界選手権大会等に代表される国際大会を研究主題にしたものが多い。

第4節 他競技における審判規定改正前後の競技分析

柔道以外の競技分析、とりわけ審判規定改正前後を研究主題にした研究について、レスリング⁹⁾では、改正による横くずし技術への集中や平均得点の減少という報告がある。

球技種目について、バスケットボール競技においては「チームファウルの罰則とトラベリング等の変更によりスコア率やファウル率が有意な増加」¹⁰⁾という報告や「チーム戦術の変容や戦術・戦略が顕著に影響する」³⁰⁾といった報告がみられた。また、バレーボール競技では、審判規定の改正が頻繁に行われており、技術や戦術、ゲームの様相に大きな影響を及ぼし、特に近年の改正はマスメディアを意識したもの⁷⁷⁾であると指摘している。サッカー競技においては、審判規定改正に伴うゴールキーパーの

プレー時間を研究した例⁵⁹⁾があり、ルール改正によりスローイングの方がキックよりも有意な保持時間が短かった。」「ルール改正やルール適応の基準変化は、スポーツの技術的、戦術的要素に重要な影響を与えると考えられる。その変化の流れを事前に予測して、いち早く対応することは強化を進める上で重要な要因といえる。」としている。ソフトテニスにおいてはルール改正に伴うエネルギー量の変化⁶⁰⁾、ラグビー競技においては、魅力を高めるためのルール改正であり、それに伴うインプレー・アウトプレーの変化を研究した例³⁷⁾がある。水球競技においては試合時間、泳距離の増加が認められた。点や展開の早いゲームへの変化、さらには体の接触時間の短縮⁵²⁾が示唆されたものであった。

このように審判規定改正による競技分析においては球技種目が多く認められた。「ゴール」や「ポイント」といったものを判定する意味においては格技種目であるが、柔道競技と共通するものがあると考えられる。前述のとおり、柔道競技においては過去のIJF 審判規定改正は幾度となく施行されてきた。しかしながら、技術内容を比較した研究⁵⁹⁾や、柔道衣規定の変更による競技内容への影響についての報告⁷³⁾は散見されたものの、施技時における施技者のみならず相手の技術ならびに組み手戦術などの相違について競技分析を行った例は皆無に等しいのが現状である。IJF 審判規定改正に伴う競技内容の変化についての研究を行うことは、今後の世界柔道においても大きな意義を有するであろうと考える。

第5節 先行研究のまとめ

柔道競技については、大会毎の競技分析や特定選手や体格差のある無差別による試合の競技分析は多く認められた。

一方で、他競技においては、球技種目を中心に審判規定の改正による前後の比較分析を行った研究は様々な種目で散見された。前述したように柔道競技においては度重なる審判規定改正が繰り返されているにも拘わらず、その研究事例は数少ない。醍醐³⁾は審判規定改正後の試合を「審判規定改正によって試合の戦いぶりそのものが大きく変化した」と報告した。また、競技の変容については、第9回ウイーン世界選手権時に軽重量級と軽中量級の日本人選手が敗退した際に、世界の柔道が大きく変化したことを意味しており、審判規定改正によって試合の戦いぶりが大きく変化したとの指摘⁴⁴⁾があり、審判規定改正が競技内容に与える影響は必至である。

上記のようなことから、審判規定の改正により世界柔道の動向が変わることが考えられるといってもよいであろう。しかし、柳澤は近年の柔道における試合審判規定の改正について「変更後の検証を十分にしているとは思われない」⁷⁵⁾としているように、審判規定改正の及ぼす影響を検討することは、世界的に普及を遂げた、柔道競技における今後の発展に必要な事項である。最新の審判規定改正のもたらす競技成績や柔道技術および戦術への影響を詳細に調査・検討することは、重要な課題であると考えられる。

第3章 研究目的

本研究では、IJF 審判規定改正が競技内容に及ぼした影響を探るとともに、軽量級及び重量級の競技者における競技特性を分析することを目的とする。技術・戦術的行動の知見を得た上で、現在における最新の世界柔道の動向を知り、コーチング現場に役立てることへの一助としたい。

第4章 研究方法

第1節 対象試合

研究対象とする大会として、2008年、2009年に欧州・フランスにて行われたフランス国際柔道大会及びグランドスラム・パリ国際柔道大会とした。大会規模は、2008年フランス国際柔道大会（以下、2008年大会と略す）では60カ国、362人⁴⁷⁾、2009年グランドスラム・パリ国際柔道大会（以下、2009年大会と略す）男子は48カ国、231名¹⁴⁾であった。

対象とする試合は、男子60kg級、66kg級、73kg級、81kg級、90kg級、100kg級の6階級の両大会合わせて全476試合(2008年:293試合、2009年:183試合)とした。なお、体重上限のない100kg超級は、選手間に著しい体重差があるなど、技術及び戦術を研究対象とした本研究の対象として扱うには困難となる様々な要因が介在²²⁾⁵⁰⁾⁶⁴⁾するため、研究対象からは除外した。大会基本情報は表1に示した。

第2節 分析者

上記の試合について、全日本柔道連盟強化委員会科学研究部が収録した映像を使用し、分析者によって検討がなされた。分析者には、講道館柔道有段者総数1802381人⁷⁰⁾のうち、僅か4.6%である講道館柔道四段以上の資格を有し、修業年数15年以上の柔道指導現場に携わる者3名が選ばれた。分析者は資格及び修業年数ともに詳細かつ高度な専門知識を有していると判断し、選定した。分析者の基本属性は表2に示した。

第3節 競技分析シートの作成

本研究では、対象試合の内容を比較し、ポイント取得技における特徴を捉えることができる従来の「柔道競技分析シート」⁷⁾⁸⁾⁵⁴⁾⁵⁵⁾を参考に、組み手・施技時におけるより詳細な項目を加筆した調査用紙「柔道競技分析シート 2009」（以下、競技分析シートと略す）をMicrosoft社のExcel2007を用い作成した。作成した「柔道競技分析シート 2009」は資料1に示した。競技分析シートの作成に際しては、上記した分析者3名が合議した上で採用とした。

第4節 対象項目

本研究を行うにあたり、対象とした項目は、以下のとおりである。

(1) 試合結果及びポイント取得技に関する項目

- a) 全試合数：映像不鮮明による分析不可能な試合は除外した。
- b) 総施技数：牽制目的での足技については除外した。
- c) 「待て」の回数：試合中断数
- d) GS 数：延長戦が行われた数
- e) 反則ポイント数：「指導」及び「反則負け」を宣告された数
- f) 取得ポイント：2008 年は「効果」ポイントも含む
- g) 技分類
- h) 技名（投技）

技分類及び技名の項目については、「講道館技名称及び国際柔道連盟技名称」⁸³⁾⁸⁵⁾を基準に作成。

(2) 投技の施技に関する項目

- i) 施技様式：1 回目の施技では「単発」、2 回以上の施技を続けた場合を「連続」、施技時に他の技より変化したものを「変化」、相手の施技に対して返したものを「返し技」と分類した。
- j) 前傾姿勢：施技者の施技時における姿勢状態
- k) 技方向：施技時における引き手方向を「同方向」、釣り手方向を「逆方向」とした。

(3) 投技の組み手に関する項目

組み手の項目を作成するにあたっては、「柔道衣の各部の名称」¹⁸⁾¹⁹⁾を参考の上、加筆した。

- l) 組み手状態：施技者の主流組み手を分析した後、施技時に釣り手・引き手ともに持った状態を「充分」、釣り手だけを持った状態を「釣り手のみ」、引き手だけを持った状態を「引き手のみ」、全く組んでいない状況より持った瞬間に施技した状態を「組み際」と分類した。
- m) 釣り手位置：施技時の釣り手の位置
- n) 引き手位置：施技時の引き手の位置
- o) 組み手主導権：施技時の組み手において施技者が有利な場合を「有」、施技者・相手ともに互角の状態を「互角」、相手が組み手有利な場合を「無」と

分類した。

釣り手位置及び引き手位置については柔道衣の各部の名称¹⁷⁾¹⁸⁾、過去の競技分析シート⁷⁾⁸⁾⁵⁴⁾⁵⁵⁾を参考に加筆作成した。

(4) 投技の相手に関する項目

p) 相手の前傾姿勢：ポイント取得された相手の施技時における姿勢状態

q) 相手の釣り手位置：ポイント取得された相手の施技時における釣り手位置

r) 相手の引き手位置：ポイント取得された相手の施技時における引き手位置

(5) 固技に関する項目

s) 固技攻撃：取得ポイント後及び固技によりポイントを取得した際の固技攻撃の様式、腹臥位の状態より、移行する「上・攻」、腹臥位の状態より体を回転させ、移行する「上・回転」。施技者が背臥位となり、移行する「下・攻」や相手の体を回転させる「下・回転」、固技に移行しない「無」に分類した。

第5節 分析方法

分析者によって、競技分析シートに沿って入力されたデータは、全て項目ごとに集計を行った。なお、分析者が判定をする上で、映像不鮮明や3名の合意が得られなかったものは「不明」扱いとした。

分析の際には、全6階級を対象とする「全体群」、60 kg～73 kgを対象とする「軽量群」、81 kg～100 kg級を対象とする「重量群」の3グループごとに、2008年大会と2009年大会の試合を比較・検討した。これは、階級によって施技傾向が異なる⁷⁾⁸⁾¹²⁾⁵⁴⁾⁶⁷⁾と考えられるからである。

第6節 統計処理

3グループごとに、それぞれの項目について比率差検定⁴⁾⁵⁾⁵⁷⁾⁵⁸⁾を行い、有意水準は5%未満とした。

一部の少数の結果の中より、分析者3名での検討により抽出したIJF審判規定改正に影響を及ぼすとされる技術や戦術についての比較・算出については、フィッシャーの直接確率法²⁶⁾を用いた。

第5章 研究結果

第1節 大会概要及びポイント取得技に関する項目

収録された映像を基に2008年大会及び2009年大会の試合を分析した。その上で、集計・検定を行った結果、以下のような知見が得られた。以下に記される「減少」や「増加」という表現は、全て2008年大会と比べ2009年大会においての数値の変化とする。

表3では全試合数、総施技数、試合中断の「待て」の回数、GS数、反則ポイント数の結果を示した。全体群の試合数は、2008年大会293試合、2009年大会183試合であった。総施技数は2008年大会3690、2009年大会2748であった。1試合平均に換算すると、2008年大会12.6、2009年大会15.0であった。「待て」の回数は、2008年大会3060回、2009年大会1899回であり、1試合平均では、2008年大会10.4回、2009年大会10.4回であった。GS数は2008年大会24試合、2009年大会17試合であり、全試合数の2008年大会は8.2%、2009年大会は9.3%であった。反則ポイント数は2008年大会141、2009年大会230という結果であった。軽量群の試合数は、2008年大会151試合、2009年大会92試合であった。総施技数は2008年大会2160、2009年大会1706であり、1試合平均に換算した結果2008年大会14.3、2009年大会18.7であった。「待て」の回数については、2008年大会1571回、2009年大会1074回、1試合平均では2008年大会10.4回、2009年大会11.7回であった。GSに突入した試合数は、2008年大会11試合、2009年大会12試合であり、軽量群における全試合数の2008年大会は7.3%、2009年大会は13.0%であった。反則ポイントは2008年大会51、2009年大会109という結果であった。重量群では、試合数は、2008年大会142試合、2009年大会91試合であった。総施技数は2008年大会1530、2009年大会1042であった。1試合平均に換算すると2008年大会10.8、2009年大会11.5であった。「待て」は、2008年大会1489回、2009年大会825回であった。1試合平均では、2008年大会10.5回、2009年大会9.1回であった。GS数は2008年大会13試合、2009年大会5試合、重量群における全試合数の2008年大会は9.2%、2009年大会は5.5%であった。反則ポイントは2008年大会90、2009年大会121という結果であった。

取得ポイントについては表4に示した。「一本」については、若干の増加結果は得られたものの有意性は認められなかった。「技あり」は1%水準で有意な増加、「有効」

については、5%水準で有意な増加が認められた。軽量群では、「技あり」が0.1%水準で有意な増加が認められた。重量群においては、「有効」が5%水準で有意な増加が認められた。

次に、技分類による取得ポイントの結果は表5に示した。全体群及び軽量群では、各技分類より5%水準で有意性は認められなかった。重量群の「腰技」については、5%水準で有意な増加が認められた。

各技分類による詳細な技ポイントの結果は表6に示した。「足技」における「一本」及び「技あり」取得が1%水準で有意な増加が認められた。重量群についても、「足技」において「一本」が1%水準で有意な増加が認められた。

技分類より、投技に注目し、技名ごとに取得ポイント数を抽出したのが表7である。ここでは、「手技」に分類される「双手刈」が5%水準で有意な減少が認められ、「掬投」では1%水準で有意な減少が認められた。その一方で同じ「手技」である「一本背負投」は1%水準で有意な増加が認められた。「腰技」に分類される「払腰」では5%水準で有意な増加が、「真捨身技」に分類される「引込返」では5%水準で有意な減少が認められた。軽量群では、「手技」に分類される「肩車」「朽木倒」において有意性が認められた。「肩車」では1%水準で有意な増加が認められ、「朽木倒」では5%水準で有意な減少が認められた。重量群については、「掬投」が5%水準で有意な減少が認められた。また、「手技」に分類される「踵返」においても5%水準で有意な減少が認められた。さらに、真捨身技に分類される「引込返」についても、5%水準で有意な減少が認められた。

第2節 投技の施技に関する項目

投技による取得ポイントを得た際の施技様式や前傾姿勢の有無、技の方向について分析を行った。これらの分析は、ポイント取得の多数を占める投技の詳細な特徴を得られることができると考えられ、項目を作成した。

ポイント取得時における投技の施技様式についての結果は、表8に示したとおりである。全体群での結果では、「単発」が1%水準で有意な増加が認められた。「返し技」は、1%水準で有意な減少が認められた。軽量群では、有意性の認められる結果はみられなかった。しかし、重量群では「単発」では0.1%水準で有意な増加が認められた。「返し技」については1%水準で有意な減少が認められた。

表 9 では、施技時の前傾姿勢について示した。全体群では、1%水準で有意な減少が認められた。また、重量群においても、5%水準で有意な減少が認められた。施技時の技方向の結果については表 10 に示した。ここでは、「同方向」「逆方向」とともに有意性は認められなかった。

第 3 節 投技の組み手に関する項目

施技時における組み手状態についての結果は、表 11 に示した。組み手が「充分」な状態での施技は、0.1%水準で有意な増加を示した。一方で、「釣り手のみ」と「組み際」についての結果は、前者では 1%水準で有意な減少、後者では 5%水準で有意な減少が認められた。軽量群では、「充分」が 1%水準で有意な増加が認められた。重量群においても「充分」が 1%水準で有意な増加が認められ、「釣り手のみ」が 1%水準で有意な減少が認められた。「充分」については、各階級群においても高い水準で有意な増加が認められた。

施技者の釣り手位置は表 12 に示した。全体群では、「背部」が 5%水準で有意な減少が認められた。「袖（前腕）」においては、5%水準で有意な増加が認められた。軽量群では、「背部」を持った状態が、5%水準で有意な減少が認められた。「袖（前腕）」を持った状態は 1%水準で有意な増加が認められ、全体群の増減の結果と同様の傾向がみられた。重量群の結果では、有意性は認められなかった。

引き手位置については、表 13 に示した。全体群では、「前襟」を持った状態での施技が 5%水準で有意な増加、「袖（上腕）」では、1%水準で有意な増加が認められた。一方で、脚を持つ動作においては、「脚（下腿）」は 5%水準で有意な減少、「脚（大腿）」は 1%水準で有意な減少が認められた。軽量群では、「前襟」が 5%水準で有意な増加、「脚（大腿）」が 5%水準で有意な減少が認められた。重量群では、「脚（大腿）」を持った状態で施技は、5%水準で有意な減少が認められた。その一方で、「袖（上腕）」を持っていた状態で施技した行動は 1%水準で有意な増加が認められた。「脚（大腿）」を持つという組み手戦術が全ての階級群において有意な減少が認められた結果となった。

組み手主導権については、表 14 に示した。全体群では「有」の状態が、0.1%水準で有意な増加が認められた。また、「互角」の状態では、1%水準で有意な減少が認められた。軽量群では、有意性のある結果は認められなかった。重量群については、「有」の状態では、0.1%水準で有意な増加が認められた。「互角」の状態では、

施技したものは、1%水準で有意な減少が認められた。

第4節 投技の相手に関する項目

本項目については、ポイントを取得された相手の組み手位置及び前傾姿勢について分析を行った。

相手の釣り手位置については、表 15 に示した。全体群では「前襟」を持つという行動が、5%水準で有意な増加が認められた。軽量群では、「奥襟」が 5%水準で有意な増加が認められた。重量群では、全体群と同様「前襟」が 5%水準で有意な増加が認められた。

相手の引き手位置については、表 16 に示したとおりである。全体群では、「脚（大腿）」持つ行動が 0.1%水準で有意な減少が認められた。軽量群や重量群では有意性は認められる結果はみられなかった。

相手の前傾姿勢については、表 17 に示した。全体群及び軽量群では有意性は認められなかった。一方、重量群では 5%水準で有意な減少が認められた。

第5節 固技に関する項目

固技攻撃の結果については、表 18 に示した。「上・攻」の攻撃様式が 1%水準で有意な減少、「無」の状態は 5%水準で有意な増加が認められた。軽量群では、「上・攻」が 0.1%水準で有意な減少、「上・回転」は 1%水準で有意な増加が認められた。重量群については、有意性は認められなかった。

第6章 考察

第1節 IJF 審判規定改正による影響

2008年大会と2009年大会を比較した上で、上記の結果より大会全体について述べていく。

(1) 大会概要及びポイント取得技に関する項目

総施技数では、増加傾向を示した。これは、反則ポイント厳格化により審判員が反則ポイントを与える機会の増加傾向が窺えたために、競技者は積極的に施技していることが推察される。「待て」による試合中断の回数については、同率であったが。これは、IJF 審判規定の改正により「場内外の判断基準」が緩和されたものの、実効性がなかったように推察される。これは、場外際においての攻防は緩和されたものの、試合を進行する上で変化していないと考えることもできる。GS数については増加傾向を示した。これは、全体として出場選手が限定されてきたため、均衡した試合内容が多くなったことが考えられる。

取得ポイントでは、IJFが重視している「一本」について、若干の増加はみられたものの有意性は認められなかった。一方、「技あり」及び「有効」に有意な増加が認められた背景には、審判規定改正後初の国際大会によりIJF 審判規定改正の「効果」ポイント廃止が、「技あり」及び「有効」への技の判定基準が緩和しているのではないかと考える。それまで「有効」に近い「効果」や「技あり」に近い「有効」が有意性の認められたポイントに移行したため、影響を及ぼしているのではないかと推察する。また、IJF 審判規定の改正により競技選手の施技レベルが高くなっていることも考えられる。

技分類と取得ポイントの比較では、取得ポイント全体では有意性の認められた結果は得られなかったが、「足技」における詳細ポイントの「一本」「技あり」では高い水準で有意な増加が認められた。これは、技術・戦術が現在ほど多様化していない時期の国際大会において「足技」による決まり技が多かったという結果を示した報告⁶⁷⁾⁷⁴⁾より、効果的なものであったと論じている。今回のIJF 審判規定改正がなされる前の世界選手権を分析した報告²⁰⁾では、「足技」の減少が指摘されており、その背景には、相手が片脚支持でなおかつ「脚」を持ちながら「大内刈」や「内股」を施技するため、「掬投」で返すことが可能となり、ポイントを与える危険性が高くなるからと推察さ

れる。今回の IJF 審判規定の改正では、柔道衣の下穿きを直接握ることや前傾姿勢等の反則ポイントが厳格化したことから、施技者にとっては施技する際に返される危険性が減少したため、「足技」が増加したと考えられる。

技名・取得ポイントでは、柔道衣の上衣を持たなければ施技することが不可能な「払腰」や「一本背負投」といった技が増加した。「払腰」については、標本数が少ないため、今後も検討する必要性を感じた。「一本背負投」については、柔道衣を握ることの可能な範囲が制限されたために、改正前よりもこの技術の依存度が高くなった結果を示したものとする。「引込返」も上衣を持って相手の脚の間にもぐり込むように施技するものであり、この技術については、改正前では反則ポイントの適用が遅いため、リスクの少ない捨身技の施技が多いという点を指摘した報告²⁰⁾⁴¹⁾⁷⁹⁾がみられた。しかし、前述した偽装攻撃による反則ポイントの厳格化の影響により減少につながったものと推察する。また、減少が認められた「掬投」や「双手刈」については、近年の柔道競技を討議する上では不可欠な技術であった。改正前の報告では、「欧米選手の殆どが下半身狙いの技術の多用」⁷⁹⁾という報告がなされていた。これらの技術は、片一方の手ないし両手で「脚」を持ち、施技するものである。柔道衣の下穿きを握ることへの反則適用がこれらの技術を使用した施技への抑制につながり、競技者が使用する技術の変更を余儀なくされたと考えられる。

(2) 投技の施技に関する項目

施技様式では、「単発」が高い水準で有意に増加を認めた。この結果については、前述のような柔道衣の上衣を持つことで施技可能な技術が増加したと考えられる。上衣を持ち、相手を組み手で制した上で、施技できるため「単発」であってもポイント取得には有効な戦術となることがわかる。一方で、「返し技」に有意な減少が認められたことについては、反則ポイントの厳格化により「脚」を持たないことや、消極的と解釈される極端な前傾防御姿勢からの施技が罰則対象となることで減少したと認識する。

次に、前傾姿勢については、施技者の前傾姿勢は有意な減少が認められていることから、上半身を起こした姿勢の良好な状態から施技することでポイントを取得している傾向がみられた。これは、施技する技術に変化が認められたことで、前傾姿勢では反則ポイントの適用になるだけでなく、「有効」以上のポイントを取得するための技術を使用する場面では有用でないと各国の代表チームのコーチや競技者が共通認識していると考えられる。改正前の報告では「組み合わせないスタイル」²⁰⁾という報告もみ

られたが、2009年における大会では、「頭を付け合う低い姿勢での組み手争いや、組まない状態が長く続くという現象は以前に比べると減ってきた。姿勢が起きてきて、組み合っただけの攻防が増えるという現象は柔道にとっても喜ばしいことである」¹⁴⁾といった報告からIJF審判規定の改正が競技に好影響を与えていることが推察できる。

技方向については、有意性は認められず、改正による変化も示唆されなかった。

(3) 投技の組み手に関する項目

組み手状態では「充分」が非常に高い水準で有意な増加が認められた。一方で、「釣り手のみ」「組み際」は有意な減少が認められた。「充分」な状態が全体においても高い水準で増加したことは、「釣り手のみ」や「組み際」といった「充分」でない状態ではなく技効力を高めるための状態作りや意識が顕著に表れていることがわかる。

「充分」であることが多くなったことで、技分類の「足技」や「払腰」及び「一本背負投」の増加にもつながっていると考える。技効力を高めるための重要な要素として、襟と袖を持つ²⁰⁾⁷⁹⁾ということや、袖と中襟を持つといった標準的な組み方¹²⁾という点を示した報告がある。さらに、襟と袖を持つという動作は「正しい柔道」「クラシックジュウドウ」⁷⁹⁾と表現されることもあり、「伝統的な柔道を取り戻す」という点ではIJFの望む競技様式に回帰しているという論点も考えることができる。技効力を高めることは、高度で正確な技術及び戦術が必要となってくる。今回のIJF審判規定の改正により、ポイント取得に有効な戦術である「早く釣り手と引き手を持つ」⁴⁷⁾、いわゆる「充分」な状態にすることは、組み手により相手の動きを止める、制するといった状況から施技するための重要な戦術である。このことから「充分」な状況下で施技を行いポイント取得した数の増加は「一本を取り戻す」⁷²⁾ための柔道競技においては好影響を及ぼしていると考えられる。改正後の報告においても「直接ズボン握る事が反則となるルールの改正もあって、組み合っただけ柔道をしていた。」³⁶⁾という指摘があった。しかしながら、「お互い両手で組み合うことが試合での絶対条件」³⁵⁾という1998年以降に段階的に整備された審判規定による方針は拘束力の存在がないのではないかという規定のあり方に大きな疑問が残った。改正後も技術・戦術が制限されつつあることから、上半身を持たざるを得ないという戦術に強いられることが多いものの、その絶対条件が浸透しているとは言い難い。

また、改正前より多用⁷⁾²⁰⁾³⁵⁾⁷⁹⁾⁸⁰⁾され、減少は認められるものの依然として「肩車」により取得するポイントは数多い。この技術では「脚」を持つことが施技する際には、

不可欠である。しかし、直接「脚」を取るような技術ではなく、釣り手により相手の上半身を制した後に「脚」を持って投動作に移るので、改正後の審判規定においても抵触することは皆無に等しい。そのことから、「充分」な状態で施技する傾向に移行した 2009 年大会においても依然としてポイント取得においては効果的な技であるといえる。

施技時に持っていた釣り手位置については、「背部」に有意な減少が認められた。これは、改正前の報告において主流技の代表技術として挙げられた「掬投」や「朽木倒」といった技術を使う機会が減少したからであると考えられる。引き手位置では、「脚(大腿)」や「脚(下腿)」も有意な減少が認められたことで、上記の技術を使用する際に釣り手及び引き手位置として最適な部位の減少が両方ともに認められていることから、技術及び戦術において明らかな影響を受けていることがわかる。一方で、「袖(上腕)」「前襟」は有意な増加が認められた。組み手位置において、2009 年大会の報告では、「直接ズボン握ることに対し罰則が与えられるようになったが、殆どの選手が対応しており、ズボン握って罰則を与えられた選手はあまりいなかった」¹⁴⁾という報告があることから、「脚」を持って施技する戦術から「襟」や「袖」といった部位を持つという戦術に転換を余儀なくされていることが窺えた。

組み手主導権については、施技者が組み手を支配している状況で「有」すなわち有利な状況で施技することが、改正後ではポイント取得に重要な要素⁸⁾となっていると考える。改正前までは不利な状況下からの施技を行えた⁷⁾のであるが、戦術の制限により「有」な状況下でなければポイント取得は難しくなると推測する。

(4) 投技の相手に関する項目

ポイント取得された相手の釣り手については、相手の組み手位置の釣り手位置では、「前襟」を持つ行為に有意な増加が認められた。引き手位置については、「脚(大腿)」を持つ行為に有意な減少が認められた。これは、施技者の組み手位置と同様にポイント取得された選手も組み手意識を変化させていることが示された。特に「脚(大腿)」を直接持てなくなったことについては、これまで、組み手主導権が「互角」あるいは「無」の状況におかれていた競技者にとって、「掬投」等の技を繰り出すことで形勢を変える機会があった。ところが、改正により、このような技を仕掛けることができなくなったことが考えられ、不利な状況下で引き手位置として「袖」よりも簡便に持てる「襟」を持つという戦術に変更していることが推察された。今後は迅速に組み手主

導権を握り、優勢に展開するかという点がポイント取得及び勝利においては重要になってくる。

(5) 固技に関する項目

表 17 に示した固技に対する攻撃様式では、ポイント取得後は、寝技への移行をせずに、立技においての勝負を重視している傾向が認められた。これは、改正点に抵触する点が見当たらないだけに、寝技への移行を行う上で、体力消耗の面や審判員の「待て」のタイミングを考え、固技攻撃への意識が希薄化していると推察した。

第 2 節 軽量群と重量群の競技特性

過去の研究⁷⁾⁸⁾¹²⁾⁵⁴⁾⁶⁷⁾より施技傾向も異なることが、推測されるため、軽量群と重量群の競技特性を考える。

(1) 概要、取得ポイント及び技術

軽量群において、施技数は増加傾向であった。これは、「反則ポイントの厳格化」により積極的に攻撃を展開する「ダイナミック柔道」を推奨する IJF の意図するねらいと合致していることが考えられる。GS 数については、2008 年大会に比べ、2009 年大会では、出場選手も限定され、高度なレベルの選手同士で試合を行っていることが予想され、軽量群では特に均衡した試合が多く、このように増加傾向がみられたと考える。

重量群では、施技数は若干の増加傾向を示した。ここでも積極的に攻撃するという意思の下、試合を行っていると考えた。一方で、GS 数と「待て」の結果については、それぞれ減少傾向を示した。GS 数については、「充分」に組むことが増加しているため、ポイントを取得して時間内に勝敗がついているということが考えられる。「待て」については、「場内外の判定基準」が寛容的になったため、動作の少なくなる重量群では減少傾向を示したのではないかと考える。

取得ポイントにおいては大きな差異はみられなかった。技術において、軽量群では「肩車」の増加について重量群における「肩車」への依存は改正後減少傾向にあった。しかし、軽量群の競技者は、「掬投」や「朽木倒」といった技術に対する依存度は低下したものの、改正後の IJF 審判規定に抵触しない「肩車」への依存は増加していると推察する。軽量群の技術特性としては「手技」を使用するという報告¹²⁾があるが、「手技」に分類される技術の中で審判規定の範囲内の技術に移行していることが考えられ

る。

重量群では、「腰技」が増加した。これは、軽量群においてはみられなかったことである。重量群では改正前にポイント取得技術として、本研究のみならず「手技」による「掬投」に依存する傾向²⁰⁾がみられた。しかし、IJF 審判規定改正により制限された戦術から依存する技術が分散したと考えられる。詳細な取得ポイントについても、重量群は改正後には「足技」によりポイントを取得していることが増加したことが認められた。これは、重量群の「足技」による取得ポイント率の高さは過去の報告¹²⁾にもあるとおり、重量群のひとつの競技特性といえる。

施技様式及び前傾姿勢については、軽量群においては改正前後の差異はみられなかった。一方で、重量群では「単発」に増加、「返し技」に減少が認められた。軽量群においては、動作が機敏であるということで施技する際の様式にとらわれずにポイントを取得していることが多いと考えられ、技術を使用するまでの戦術に偏りがなく、また姿勢についても前傾姿勢に偏った戦術がないということが窺える。重量群については、重量級の軽量級に比べ平均施技数は減少するという報告⁷⁾からもあるように、技の連絡や変化から施技することが極めて少数であることが推察される。また、「返し技」が改正前に多かった理由として、「単発」による施技様式のため、予測が容易で「返し技」を施しやすいことが考えられる。これは相手の施技に対し、「掬投」で応じる際には前傾姿勢になることが多いからである。「掬投」の技術が減少していることから「返し技」が減少したことも比例していると考えてよいであろう。

(2) 施技者及び相手の組み手戦術

施技者における組み手戦術では、両群とも「充分」が高い水準で増加した。これは階級に関係なく組み合って柔道を行うことを強く認識していることが伺えた。重量群では、「釣り手のみ」が高い水準で減少が認められた。この点については、前述のような使用する技術が「釣り手のみ」の状態から「充分」に組んで施技するものに変化していることの象徴であると推察する。一方で、軽量群では「釣り手のみ」に有意性のある変化はみられなかった。これは、「肩車」に依存することが増加しているために「充分」な状態から施技することの重要性を認識しつつも、近年では最も有効技術を使用されている。したがって、大きな変化に脈絡していないことが考えられる。

釣り手及び引き手位置について、軽量群では釣り手位置「袖（前腕）」が増加し、「背部」が減少した。「袖（前腕）」については、釣り手位置として持った状態より軽量群

の選手は逆方向の「肩車」や「一本背負投」「小内刈」のような施技を行ったために増加したことが推察できる。また、軽量群の引き手位置については「前襟」が増加、「脚（大腿）」が減少した。「脚（大腿）」については重量群においても減少が認められた。これは、有意性は認められなかったが、「掬投」「朽木倒」は軽量群では減少傾向がみられ、重量群では、「掬投」「踵返」に有意な減少が認められた。これらの技術は釣り手の役割を担う際には「背部」、引き手の役割を担う際には「脚」を持ち、施技を行う。それに伴い、減少傾向が軽量群において釣り手では「背部」、引き手では「脚（大腿）」を持つ戦術を抑制していると考えられる。また、重量群の引き手位置「前襟」増加の背景には、「足技」や「真捨身技」を施技する際に釣り手及び引き手ともに「襟」を持つという戦術を用いていることが窺えた。

組み手主導権では、軽量群では有意性は認められなかった。このことについて、組み手主導権の有無に関わらず、施技する戦術を有していることが考えられる。組み手主導権を有した状態で技効力を高めるという報告⁹⁾とは異なり、軽量群の競技者は主導権の有無にこだわらず、状況に応じて俊敏な動作より施技可能であることが考えられる。一方で、重量群では「有」増加が認められた。その背景には、重量群は動作が少なくなること、組み手主導権が「無」の状況から施技することができた技術の使用が厳しい状況になったためである。この結果は、重量群の「掬投」「踵返」減少や「返し技」の減少と大きく関わってくることが考えられる。

相手の組み手戦術については、釣り手位置では軽量群が「奥襟」、重量群が「前襟」に増加を認めた。これらは「背部」を持った状態より施技できる技術が制限されたことで「襟」を持つ戦術に軽量群及び重量群ともに変更したことが示唆された。重量群における前傾姿勢の減少も反則の厳格化や戦術の制限による影響が考えられる。

(3) 固技に関する項目

固技の攻撃では、軽量群及び重量群ともに有意性は認められないものの、減少傾向にある。全体群の結果では5%水準で有意に減少が認められていることから、IJF 審判規定改正により固技についての技術及び戦術規制がなされていないにも関わらず、このような結果になることは予測し難いものである。改正前後の大会において報告¹⁴⁾⁴⁷⁾⁸⁰⁾では有効な戦術として固技への移行が挙げられていることから、大会毎の固技戦術の影響を研究していく必要があると感じた。

第3節 今後の柔道競技及びコーチング現場における方策

今回のIJF 試合審判規定を改正した後に行われた2009年のグランドスラム・パリ国際柔道大会では、各国のメダル獲得状況は一極集中ではなく、各大陸に分散されている傾向²⁰⁾³²⁾³³⁾³⁵⁾⁸⁰⁾にある。これまで外国チームの技術・戦術の多様化・発展の報告³⁶⁾³⁸⁾³⁹⁾⁴¹⁾⁴⁶⁾⁴⁹⁾⁵⁶⁾⁷⁵⁾⁷⁸⁾⁸⁰⁾は後を絶たない状況で、世界的に競技の高度化⁸²⁾⁸⁴⁾していることが考えられる。創始国である日本も以前のように優勝することが当然とみられるのは、現状では厳しい。組み手においては、「充分」であることの重要性はあるが、釣り手や引き手の位置は大きく定められていることはない²⁷⁾。そのため、緻密な戦術が重要と同時に、投げるための正確な技術を身につけることが不可欠となってくる。戦術では、今後同レベルの者同士が対戦するこのような国際大会においては、「選手自身が戦術に関する知識、戦術のバリエーションや選択肢を十分に身につけていない場合、さらには選手が戦術達成力を備えていない場合には、同じレベルの対戦相手であれば負けてしまうことになる。」¹¹⁾ということなので、これから柔道競技を指導していく場面では、柔道衣の上衣を持つことを基本とした詳細な戦術を検討し、指導していくことが要求されるであろう。

今後のコーチング現場において活用すべき方策については、以下のようなことが考えられる。

(1) 技術

「効果」ポイントが廃止されたことで、確かな技術が必要とされる。そのため、「打込」練習の強化や「崩し・作り・掛け」²⁴⁾を理解させることで技術の習熟度を向上させる。また、「脚」を持つ技術は抑制しなければならないため、柔道衣の上衣を持って仕掛ける技術を習得させる。

(2) 戦術

組み手戦術においては、釣り手及び引き手の両手を持つ「充分」な状態と組み手主導権を有利にすることが、ポイント取得のためには重要な要素である。いち早く、「充分」の状態を作るために、競技者それぞれの使用技術や体格に合った組み手戦術を見極めての指導と反復練習を行うことが必要となる。

(3) IJF 審判規定

最新のIJF 審判規定を細部まで指導者・競技者ともに理解する。特に、審判規定の改正後は反則ポイントが厳格化していることから、細部まで理解することが不

可欠である。また、IJF 審判規定の改正により、良好な姿勢での積極的な施技が求められており、このような条件下で施技数を増加させるためには体力の向上が必要とされる。

上記のように方策を述べた上で、今後の柔道競技について考えていく。

2009 年に行われた世界選手権では、参加国が 97 カ国となり柔道はスポーツとして世界に成熟期に入ってきた⁷⁸⁾といえる。柔道発展のために改正される IJF 審判規定は本来講道館柔道発展のために今後、さらに「掬投」「朽木倒」「双手刈」「踵返」といった技術を厳しく抑制・禁止するといったような方向で改正される⁷⁹⁾議論が進められている。本研究の対象試合では改善傾向がみられた。しかし、その後の大会の報告では、「柔道衣のズボンを握ることが反則となった今でも、肩車、双手刈、朽木倒などといった技が主流」⁷⁸⁾とされており、改正後の審判規定を理解した上で、「脚」を持つ技術を使用するための新たな戦術が生まれていることも考えられる。しかしながら、条件付きとはいえ、講道館柔道において嘉納治五郎師範により起草・構築された技術が、制限ではなく禁止技として制定すべきでないという意見⁷⁹⁾もある。技術や戦術の抑制のためと考えられるさらなる IJF 審判規定改正については、未だ議論の余地があるのではないかと感じる。特に体重制限のない無差別の試合に適用がされる場合においては、柔道の魅力である体の小さい競技者が大きな競技者に勝利する⁶⁶⁾確率を減少させないためにも討議が必要である。民族的な形態⁵⁵⁾を活かし、戦術の多様・自由化により様々な戦術が編み出され世界に発展してきた柔道。理想は「日本的な柔道」⁷⁸⁾であるが、上述のような高いレベルでの応用技術⁷⁹⁾は、創始より 127 年の年月をかけて進歩を遂げた証しであるともいえよう。今後「ズボン及び脚を持つ」ことだけに限局された改正にしてしまうと、偽装攻撃についての反則ポイント厳格化は存在していても、前述のような「お互い両手で組み合うことが試合での絶対条件」という審判規定³⁵⁾が浸透していなければ巴投のような捨身技を乱発する競技者も出現するのではないかと考える。

柔道の競技特性として「柔道は徒手の格技で、互に無手で、直接に体を接して相組み、多様な格闘技術を交えて勝負を決する種目であるということ。」⁵⁰⁾という観点もあることから事象が起こってからの改正ではなく、事前に十分かつ慎重な検証・検討を行った上で、行動することが、今後 IJF 審判規定を頻繁に改正させないための根本的

な防止策になるのではないかと考える。その上で、「伝統的な柔道」「一本」を大切に
する柔道発展に有意義な IJF 審判規定となって欲しいと願うばかりである。

第7章 結論

今回のIJF 審判規定の改正の目的は、「一本を追求する」「伝統的な柔道を取り戻す」という目的で改正がなされた。すなわち、今回の試合審判規定の改正に至った経緯としては、極端な前傾姿勢から繰り出される技や脚を直接持って施技をするという技術を駆使した戦術が横行していたためであったと考えられる。その結果、「一本」を狙わずに「効果」ポイントや反則ポイントを取得し、ポイントを守り切るというような、柔道の本質から遠ざかった戦術が編み出された。これらの戦術を最大限に活用するために、技術が利用されるようになってしまった。勝利至上主義が世界に誤った形で普及してしまったといえる。これら現状からの脱却のために改正が試みられた。

- (1) 「一本を追求する」という部分では、「一本」の取得率に有意性は認められなかったため、目的は達成されているとは言い難い。しかしながら、技術・戦術において施技する技や組み手状態の変化では、釣り手・引き手ともに「充分」な状態で施技をすることでポイント取得した結果が数多くみられるようになった。このことから、「一本」を獲得するポイント取得率において、他の大会では改善傾向がみられるであろうと期待が持てる結果となった。
- (2) 「伝統的な柔道の復活を取り戻す」という目的については、IJF 審判規定改正により「脚」を持つ戦術及び「掬投」や「朽木倒」等にみられる近年の柔道競技を象徴する下半身への攻撃技術が⁴⁰⁾抑制された。このことから、「腰技」や「足技」に依存する傾向が認められたため、「柔道の魅力」を取り戻す契機になったと考える。
- (3) 改正前後の階級群毎の比較においても、軽量群では、ポイント取得したものが「手技」に依存している傾向が示唆された。一方で、重量群では、「足技」に依存していることが窺えた。組手戦術においても相違点が認められたことで階級群による技術及び戦術の特徴の違いが考えられる。

以上のことから、IJF 審判規定改正により、競技技術や戦術に及ぼした影響は与えられていることが確認された。

今後の課題については、直接的な影響が及ぼされることは考えづらいにも関わらず、

減少が認められた「固技」についての攻撃様式や、現行の試合審判規定が及ぼす影響についての詳細な研究、さらには、複数大会を比較・検討する必要があると考え、今後における課題としたい。

第8章 要約

本研究では、2009年1月1日に施行されたIJF 試合審判規定の改正が柔道競技に及ぼす影響を分析した。また、最新の世界柔道の動向を把握し、コーチングに活用していくことを目的とした。

研究方法は、収録された映像を基に2008年フランス国際柔道大会及び2009年グラウンドスラム・パリ国際柔道大会の競技内容を比較した。試合数は両年合わせて476試合であった。競技分析を行う上で、項目を作成した。作成した項目については、「競技分析シート2009」に競技内容を入力するものとした。各試合の競技分析を行った上で、2008年大会及び2009年大会の結果を比較、検定した。

統計手法を用いて比較した結果、技術や戦術において変化を示唆する結果が得られた。ポイント取得時における技術としては、技分類の「足技」によって取得した「一本」の数は1%水準で有意な増加が認められた。2008年大会に多く認められた「掬投」は1%水準で有意な減少が認められた。一方で、「一本背負投」が1%水準で有意に増加、また、「払腰」も5%水準で有意に増加しており、改正による技術傾向の変化がみられる。組み手については、釣り手・引き手ともに持った状態で施技を行う「充分」が0.1%水準で有意な増加が認められた。また、「ズボンを直接握る」ことへの反則適用から、施技者及び相手も施技時に「脚」を持つという戦術は有意な減少が認められた。さらに、施技する際の姿勢も前傾姿勢状態からの施技は5%水準で有意な減少が認められた。固技に対する攻撃様式としては、投技によるポイント取得後は、固技移行のための攻撃を行わない動作が増加している。階級群同士の比較では、軽量群と重量群を比較した結果、技術及び戦術に特徴の違いがみられた。

「一本を追求する」「伝統的な柔道を取り戻す」という目的で改正された今回のIJF 試合審判規定では、「一本」取得率には大きな変化は認められなかった。しかし、ポイント取得の技術内容や組み手戦術において改正前と比較した結果では、「脚」を持つ戦術に依存しないことで「襟」「袖」を持った状態で施技可能な技術に移行するという望ましい傾向となった。一方で、改正に無関係な固技に移行しない動作が多数みられた。

今回の改正によって懸案事項となっていた点が改善される傾向にあり、IJF 試合審判規定改正が影響のあるものであったと考えられる。しかし、改正と同時にその対策を練るのがコーチングである。本研究の先も分析を継続する必要が求められる。

謝辞

本研究を終えるにあたり、指導教員である菅波盛雄准教授に深く感謝の意を表します。

また、多くの激励、ご指導、ご鞭撻を賜りました中村充准教授、廣津信義准教授、廣瀬伸良准教授、三野大來先生に謹んで御礼申し上げます。

さらに、お忙しい中、技判定にご協力いただいた分析者にも厚く御礼申し上げます。

最後に、多くの助言を与えてくれた金持拓身君、松平憲彦君、データ入力に助力いただいた大学生諸君に感謝申し上げます。ありがとうございました。

【参考文献】

- 1) 安藤慶子：第1回太平洋沿岸女子柔道選手権大会出場者の実態，柔道，12月号，講道館：(1980)
- 2) 青戸洋二、青柳領、高野裕光、広瀬豊彦：柔道競技の僅差判定内容における分析，武道学研究，27，23：(1994)
- 3) 醍醐敏郎：世界選手権熱戦のあと，柔道12月号，20～21，講道館：(1975)
- 4) 出村慎一：例解 健康・スポーツ科学のための統計学 改訂版，154-188，大修館書店：東京 (2004)
- 5) 出村慎一：健康・スポーツ科学のための統計学入門，149-163，不味堂：東京 (2001)
- 6) 橋本年一、安藤慶子、鳥羽泰光：柔道競技における投技での効果的な技とその組み手内容に関する研究—第4回嘉納治五郎杯国際柔道大会を対象に—，武道科学研究24-2，185-186：(1991)
- 7) 廣瀬伸良、菅波盛雄、中村充、高橋進：柔道競技の投技戦術行動に関する競技分析的研究—男子柔道選手と女子柔道選手の比較—，順天堂大学スポーツ健康科学研究，第4号，76-87：(2000)
- 8) 廣瀬伸良、菅波盛雄、中村充、高橋進：柔道競技の技効力と組み手に関する投技戦術行動についての競技分析的研究，順天堂大学スポーツ健康科学研究，第5号，50-60：(2001)
- 9) 市口政光：改正ルール後の世界レスリング選手権大会（フリースタイル1982年）における技術の特徴，東海大学紀要体育学部，13，71-77：(1983)
- 10) 石村宇佐一：バスケットボールにおけるルール改正がゲームの勝敗に及ぼす影響，日本体育学会，(48)，484：(1997)
- 11) ヤーン・ケルン：スポーツの戦術入門，13-30，大修館書店：東京 (1998)
- 12) 柔道選手育成研究会：ジュニア選手育成のための柔道コーチング論，20-53，道
和書院：東京 (2008)
- 13) 柔道選手育成研究会：ジュニア選手育成のための柔道コーチング論，178-211，
道和書院：東京 (2008)
- 14) 賀持道明、徳野和彦：「2009 グランドスラム・パリ国際柔道大会」，柔道，4月号，
71-79，講道館：(2009)

- 15) 川口孝夫：「講道館段位推薦委託団体会長会議（議事録）（1）」柔道，7月号，105-110，講道館：（2009）
- 16) 小俣幸嗣：第25回世界柔道選手権を観て，筑波大学体育科学系紀要：（2008）
- 17) 講道館：講道館柔道試合審判規定，82，講道館 全日本柔道連盟：東京（2000）
- 18) 講道館：講道館柔道試合審判規定，79，講道館 全日本柔道連盟：東京（1995）
- 19) 真柄浩：柔道の試合に関する一考察，武道学研究3-1，26：（1970）
- 20) 石川美久、横山喬之、竹澤稔裕、鮫島康太、佐藤伸一郎、篠原信一：世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向-1995年と2005年の比較-，柔道科学研究14，19-23：（2009）
- 21) 正木照夫：「リオデジャネイロ大会観戦記」近代柔道，11月号，52-54，ベースボールマガジン社：（2007）
- 22) 松井紳一郎、緒方和男、橋本年一、高田十志和：体格差が勝敗に及ぼす影響（2）-一流柔道選手の形態差と試合内容の関係-，武道学研究25-（1），66-74：（1992）
- 23) 松本芳三：柔道のコーチング，33-65，大修館書店：東京（1976）
- 24) 松本芳三：柔道のコーチング，211-325，大修館書店：東京（1976）
- 25) 松本芳三、竹内善徳、中村良三：全日本学生柔道選手権大会における競技内容の分析，武道学研究VI-2，31-35：（1973）
- 26) 三野大來：看護師のための統計学，151，共立出版：東京（2005）
- 27) 村田直樹：嘉納治五郎師範に学ぶ，29-45，ベースボール・マガジン社：東京（2001）
- 28) 村山晴夫、中村勇、南条充寿、林弘典、出口達也、山口香：映像分析による競技特徴に関する検討-2001年世界柔道選手権大会女子57kg級優勝者の事例，柔道科学研究，10，1-8：（2005）
- 29) 持田達人、木村昌彦：「ワールドカップ国別対抗世界柔道選手権大会」，柔道，11月号，8-17，講道館：（2006）
- 30) 永山亮一：バスケットボールのルール改正がゲームに及ぼす影響-大学男子トップレベルを対象として-，北陸学院短期大学紀要，第34号，197-208：（2002）
- 31) 中村勇、小俣幸嗣、菅波盛雄、南条充寿、射手矢岬、渡辺直勇、出口達也、山口香、木村昌彦、前川直也：世界強豪選手の組み手と技データ，柔道科学研究，8，

- 1-11 : (2003)
- 32) 中村勇 : 「データで読む北京五輪」近代柔道, 11月号, 48-51, ベースボールマガジン社 : (2008)
- 33) 中村勇 : 「データで読むリオデジャネイロ世界選手権」近代柔道, 11月号, 46-49, ベースボールマガジン社 : (2007)
- 34) 中村勇、南條充寿、矢野勝、田中勤、林弘典、山本洋祐、正木嘉美、出口達也、渡辺直勇 : 2003年世界選手権大会の競技分析-1995~2001年大会との比較-, 柔道科学研究, 9, 1-6 : (2004)
- 35) 中村良三 : 女子柔道論, 26-39, 創文企画 : 東京 (2006)
- 36) 中村兼三、田辺勝 : 「2008年世界無差別柔道選手権大会」, 柔道, 3月号, 57-59, 講道館 : (2009)
- 37) 中井俊行、坂田好弘、河瀬泰治、石指宏通、川田浩二、辻野昭 : ラグビーゲームにおける時間経過の分析的研究-ルール改正にともなうインプレー・アウトプレー時間の変化を中心として-, 日本体育学会, 44B, 640 : (1993)
- 38) 中田善久 : 「プレーメン国際柔道大会」, 柔道, 7月号, 38-45, 講道館 : (2008)
- 39) 中田善久、阿武教子 : 「世界ジュニア柔道選手権大会」, 柔道, 1月号, 68-78, 講道館 : (2009)
- 40) 中田善久、出口達也 : 「アジアジュニア柔道選手権大会」, 柔道, 9月号, 12-20, 講道館 (2008)
- 41) 南條充寿 : 「グルジア国際柔道大会」, 柔道, 4月号, 19-24, 講道館 : (2008)
- 42) 西村豪太 : 「国際柔道連盟の暴走」, 週刊東洋経済, 32-33, 東洋経済新報社 : (2008)
- 43) 野瀬清喜 : 柔道学のみかた, 38-66, 文化工房 : 東京 (2008)
- 44) 尾形敬史、小俣幸嗣、鮫島元成、菅波盛雄 : 競技柔道の国際化, 47-76, 不昧堂 : 東京 (1997)
- 45) 岡田弘隆 : 「大会を終えて」, 柔道, 11月号, 39-43, 講道館 : (2007)
- 46) 岡田弘隆、野瀬清喜、持田達人、酒井英幸、木村昌彦 : 「冬季欧州国際柔道大会」, 柔道, 5月号, 26-55, 講道館 : (2007)
- 47) 岡田弘隆、酒井英幸 : 「フランス国際柔道大会」, 柔道, 4月号, 38-51, 講道館 : (2008)
- 48) 大滝忠夫、竹内善徳、杉山重利、手塚政孝、高橋邦郎 : 論説柔道, 173-178, 不

- 味堂：東京（1984）
- 49) 大滝忠夫、竹内善徳、杉山重利、手塚政孝、高橋邦郎：論説柔道，278-280 不味堂：東京（1984）
- 50) 大滝忠夫：柔道論考，13-40，大滝忠夫先生退官記念会：東京（1973）
- 51) 大辻広文：「IJF 臨時総会報告」，柔道，1月号，94-98，講道館：（2009）
- 52) 清水信貴、高木英樹：水球競技におけるルール改正に伴うゲーム構造の変化に関する研究，水泳水中運動科学，Vol.10, No2, 38-43：（2007）
- 53) 末永尚、久保田洋一、吉村雅文、古賀初、長谷川望、大嶽真人、石崎聡之、小塚昭仁、竹内久善：サッカーのルール改正後におけるゴールキーパーのプレー ～ 2000年競技規則改訂より～，順天堂大学スポーツ健康科学研究 第6号，159～165（2002）
- 54) 菅波盛雄、菅原秀二、中村充、廣瀬伸良：65kg級における日本とヨーロッパの柔道競技内容の分析と比較，順天堂大学保健体育紀要，第36号16-32：（1994）
- 55) 菅波盛雄、廣瀬伸良、中村充、前川直也：日本人男子柔道選手の欧州大会における敗退要因について，武道学研究34-（2），13～21：（2001）
- 56) 関根忍、金野潤、柴田真宏：「全日本選手権 大会への期待」，柔道5月号，23-29，講道館（2009）
- 57) 高木廣文：HALBAU7によるデータ解析，40-44，シミック株式会社：東京（2007）
- 58) 高木廣文：HALBAU7によるデータ解析，304-316，シミック株式会社：東京（2007）
- 59) 高橋進、中島裕幸、稲田明、村松成司、服部洋兒、菅波盛雄、斉藤仁：ルール改正に伴う柔道の技術内容の変化について—世界選手権を対象として—，柔道科学研究 4, 7-13（1996）
- 60) 高見京太、小山哲、北川薫：ソフトテニス（軟式庭球）のエネルギー消費量～ルール改正の影響をポジション別に検討する～，日本体育学会，（49），295：（1998）
- 61) 竹内外夫、鈴木輝雄、長谷川優、高橋邦郎、佐藤守直：柔道競技の勝敗に関する研究，武道学研究3-1，27：（1970）
- 62) 竹内外夫、鈴木輝雄、長谷川優、佐藤守直、高橋邦郎：柔道の勝敗に関する研究（第2報），武道学研究，4-1，30：（1971）
- 63) 竹内外夫、鈴木輝雄、高橋邦郎：柔道の勝敗に関する研究（第五報），武道学研究，

- 7-1, 72-73 : (1974)
- 64) 竹内外夫、長谷川泰一、大滝忠夫、鈴木輝雄、長谷川優：柔道の勝敗に関する研究 (第3報), 武道学研究, 5-1, 27 : (1972)
- 65) 竹内善徳、柔道指導者委員会：柔道の視点-21世紀へ向けて-, 122-133, 道
和書院：東京 (2000)
- 66) 竹内善徳、柔道指導者委員会：柔道の視点-21世紀へ向けて-, 146-162, 道
和書院：東京 (2000)
- 67) 竹内善徳、醍醐敏郎、松下三郎、尾形敬史、堀安高綾：嘉納治五郎杯国際柔道大
会の競技分析, 武道学研究, 12-1, 90-91 : (1980)
- 68) 辻原謙太郎、井浦吉彦、野瀬清喜、竹内善徳：柔道試合における競技分析的研究,
武道学研究 21- (1), 13-20 : (1988)
- 69) 辻原謙太郎、野瀬清喜、木村昌彦、三戸範之、高橋富士夫：全日本柔道選手権大
会における競技分析, 武道学研究 21-2, 39-40 : (1988)
- 70) 藤堂良明：柔道の歴史と文化, 181-264, 不昧堂：東京 (2007)
- 71) 藪根敏和、徳田眞三、木村昌彦、斉藤仁：柔道再発見, 89-91, 不昧堂 (2004)
- 72) 山口香：「マリウス・ヴィゼール IJF 会長に聞く」柔道, 12月号, 26-29, 講道
館：(2008)
- 73) 矢野勝、貝瀬輝夫、高橋進、菅原正明、岡田龍司：柔道衣に関する審判規定改正
による競技内容への影響, 武道学研究 23-2, 25-26 : (1990)
- 74) 矢野勝、貝瀬輝夫、高橋進、菅原正明、若林眞：組み方別にみた柔道試合の競技
分析-講道館杯全国体重別選手権大会を対象に-, 武道科学研究 21-2, 37-38 :
(1988)
- 75) 柳澤久、小俣幸嗣：「大会観戦記」, 柔道, 11月号, 51-56 講道館：(2009)
- 76) 横田三四郎、青柳領、高野裕光、広瀬豊彦：僅差判定における競技分析的研究,
武道学研究, 25, 56 : (1992)
- 77) 吉田康伸：バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究,
法政大学体育・スポーツ研究センター紀要, 第21号, 23-26 : (2003)
- 78) 吉村和郎：「大会総評」, 柔道, 11月号, 34-36, 講道館：(2009)
- 79) 吉鷹幸春：「大会観戦記」, 柔道, 11月号, 51-53, 講道館：(2007)
- 80) 吉鷹幸春、中田善久、酒井英幸、出口達也：「オリンピック柔道競技を振り返って」,

柔道, 10月号, 24-36, 講道館:(2008)

- 81) 吉鷹幸春、出口達也、中田善久:「ロシアジュニア国際柔道大会」, 柔道, 7月号, 30-37, 講道館:(2008)
- 82) 全日本柔道連盟:2004 審判員マニュアル, 4-5, 100-103, 全日本柔道連盟:東京(2004)
- 83) 全日本柔道連盟:2004 審判員マニュアル, 100-103, 全日本柔道連盟:東京(2004)
- 84) 全日本柔道連盟:2001 審判員マニュアル, 4-5, 全日本柔道連盟:東京(2001)
- 85) 全日本柔道連盟:2001 審判員マニュアル, 100-103, 全日本柔道連盟:東京(2001)
- 86) 全日本柔道連盟:国際柔道連盟試合審判規定, 39-57, 全日本柔道連盟:東京(2004)
- 87) 全日本柔道連盟:国際柔道連盟試合審判規定, 58-60, 全日本柔道連盟:東京(1999)

Summary

The purposes of this study were to analyze how the revision of the IJF judgment rules for matches which went into effect on January 01, 2009 would influence judo competitions, to understand the latest trend of judo in the world, and to make use of the obtained data for coaching.

As the method of the study, we compared the details of competitions in the France International Judo Tournament 2008 and the Grand Slam Paris International Judo Tournament 2009, based on recorded videos. The total number of matches for both years combined was 476. We created particular items for performing analysis of competitions. The details of competitions were to be entered in the competition analysis sheet 2009 created. After performing analysis of each match, we compared and tested the results in the tournaments in 2008 and 2009.

When the data were compared by using a statistical method, we obtained results that suggest changes in techniques or tactics. As techniques by which points were obtained, the number of "Ippon" obtained by "Ashi-waza (foot techniques)" in the classification of techniques was significantly increased at a level of 1%. The number of "Sukui-nage (scoop throw) frequently seen in 2008 was significantly decreased at a level of 1%. On the other hand, the number of "Ippon-seoinage (one arm shoulder throw) was significantly increased at a level of 1%, and the number of "Harai-goshi (sweeping hip throw) was also significantly increased at a level of 5%, showing changes in the trend of techniques because of the revision. Regarding Kumite (grasping techniques), the number of "Jubun (enough)," in which a particular technique is done while both Tsurite (lifting hand) and Hikite (pulling hand) are hold, was significantly increased at a level of 0.1%. Also, because "directly taking hold of the pants" became a violation, the frequency of a tactic of holding "Ashi (leg)" was significantly reduced at the time of doing a particular technique for both the person making the technique and the opponent. And

regarding postures taken for particular techniques, the number of techniques from the forward tilting posture was significantly reduced at a level of 5%. Regarding attack patterns for Katame-waza (grappling techniques), the number of movements, in which attack is not made for the shift to Katame-waza after obtaining points by Nage-waza (throwing techniques), was increased. When the light-weight group and heavy-weight group were compared as a comparison between groups at the same rank, there were differences in characteristics of techniques and tactics.

Under the IJF judgment rules for matches which were revised recently for the purpose of “pursuing Ippon” and “recovering traditional Judo styles,” there was no major change in the rate of achievement of “Ippon.” However, when the details of techniques and Kumite tactics for obtaining points were compared with those before the revision, there appeared a desirable trend where the shift is made to an available technique while holding “Eri (lapel)” and “Sode (sleeve)” by not depending on tactics which hold “Ashi (leg).” On the other hand, there were many movements which are not shifted to Katame-waza techniques unrelated to the revision.

With the recent revision, there appeared a trend where pending issues have been improved, and therefore the revision of IJF judgment rules for matches can be considered to be appropriate. However, measures should be developed in coaching at the time when a revision is made. After this study, it is necessary to continue further analyses.

表1. 両大会における大会基本情報

大会基本情報	2008年	2009年
開催国・都市	フランス・パリ	フランス・パリ
大会名称	フランス国際柔道大会	グランドスラム・パリ国際柔道大会
日時	2月9、10日	2月7、8日
会場	ベルシー総合体育館	ベルシー総合体育館
参加国	60	48
参加人数	362	230

表2. 試合分析者の基本属性

分析者	年齢	段位	修行年数
A	27歳	四段	19年
B	25歳	四段	19年
C	29歳	四段	17年

表3. 両大会における大会概要の比較

階級群	2008年					
	全試合数	総施技数	総取得ポイント数	「待て」の回数	GS数	反則ポイント数
全体群	293	3690	445	3060	24	141
軽量群	151	2160	234	1571	11	51
重量群	142	1530	211	1489	13	90

階級群	2009年					
	全試合数	総施技数	総取得ポイント数	「待て」の回数	GS数	反則ポイント数
全体群	183	2748	255	1899	17	230
軽量群	92	1706	124	1074	12	109
重量群	91	1042	131	825	5	121

表4. 両大会における取得ポイント内容の比較

階級群	2008年		2009年		検定値
全体群	一本	141	一本	88	0.2229
	技あり	94	技あり	80	0.0017**
	有効	118	有効	87	0.0182*
	効果	92	効果		
	総数	445	総数	255	
軽量群	一本	79	一本	42	0.4916
	技あり	42	技あり	43	0.0004***
	有効	61	有効	39	0.1438
	効果	52	効果		
	総数	234	総数	124	
重量群	一本	62	一本	46	0.136
	技あり	52	技あり	37	0.2325
	有効	57	有効	48	0.0321*
	効果	40	効果		
	総数	211	総数	131	

* P<0.05
 ** P<0.01
 *** P<0.001

表5. 両大会における取得ポイントと技分類の比較

階級群	技分類	2008年	2009年	検定値
全体群	手技	187	102	0.2516
	腰技	16	16	0.0676
	足技	118	74	0.2715
	真捨身技	49	28	0.4714
	抑込技	35	22	0.3815
	その他	29	10	0.0570
	総数	434	252	
軽量群	手技	98	55	0.3791
	腰技	8	5	0.3987
	足技	61	30	0.3117
	真捨身技	23	14	0.3560
	抑込技	20	11	0.4793
	その他	16	7	0.3102
	総数	226	122	
重量群	手技	89	47	0.1110
	腰技	8	11	0.0485*
	足技	57	44	0.1066
	真捨身技	26	14	0.3133
	抑込技	15	11	0.3399
	その他	13	3	
	総数	208	130	

総数には不明を除く数とした

* P<0.05

表6. 両大会における詳細取得ポイントと技分類の比較

階級群	取得ポイント	技分類	2008年	2009年	検定値	
全体群	一本	手技	56	28	0.818	
		腰技	11	6	0.3665	
		足技	23	28	0.0054**	
		真捨身技	12	6	0.2956	
		抑込技	16	16	0.0942	
		その他	19	4		
			総数	137	88	
	技あり	手技	42	37	0.4385	
		足技	21	17	0.0017**	
		真捨身技	14	10	0.3144	
		抑込技	6	5	0.4796	
		その他	9	10	0.2769	
			総数	92	79	
	有効	手技	46	37	0.3085	
足技		47	29	0.1635		
真捨身技		12	12	0.2182		
その他		10	7	0.4539		
		総数	115	85		
軽量群	一本	手技	29	12	0.1414	
		足技	13	11	0.1293	
		抑込技	12	10	0.1516	
		その他	22	9	0.1794	
			総数	76	42	
	技あり	手技	16	23	0.0880	
		足技	10	6	0.1096	
		真捨身技	5	7	0.2560	
		その他	9	6	0.1678	
			総数	40	42	
	有効	手技	26	20	0.2043	
		足技	23	13	0.3162	
		その他	10	5	0.3028	
			総数	59	38	
重量群	一本	手技	27	16	0.1360	
		足技	10	17	0.0081**	
		その他	24	13	0.1122	
			総数	61	46	
	技あり	手技	26	14	0.1249	
		足技	11	11	0.1810	
		その他	15	12	0.3591	
			総数	52	37	
	有効	手技	20	17	0.4808	
		足技	24	16	0.1784	
		真捨身技	5	8	0.1127	
		その他	7	6	0.4839	
			総数	56	47	

総数には不明を除く数とした

** P<0.01

表7. 両大会における取得ポイントと投技による技名の比較

階級群	技分類	2008年	2009年	検定値
全体群	背負投	29	15	0.3288
	体落	5	5	0.2133
	肩車	41	32	0.1107
	踵返	11	2	0.0645
	双手刈	7	2	0.0307*
	掬投	42	12	0.0047**
	一本背負投	8	15	0.0060**
	朽木倒	31	13	0.1293
	払腰	5	4	0.0180*
	袖釣込腰	9	10	0.094
	大外刈	12	8	0.3959
	小外刈	23	13	0.4467
	小内刈	23	10	0.1923
	内股	23	14	0.4646
	大内刈	22	17	0.2023
	巴投	14	9	0.4215
	引込返	18	5	0.0437*
隅返	13	11	0.1949	
その他	48	30		
	総数	384	227	
軽量群	背負投	12	7	0.4383
	肩車	19	22	0.0070**
	掬投	22	7	0.0796
	朽木倒	20	5	0.0325*
	一本背負投	6	7	0.0964
	小内刈	16	7	0.3049
	大内刈	9	8	0.1615
	巴投	6	7	0.0964
	その他	89	38	
	総数	199	108	
重量群	背負投	17	8	0.2151
	肩車	22	10	0.1583
	掬投	20	5	0.0121*
	朽木倒	11	8	0.3937
	踵返	5	2	0.0322*
	大外刈	8	7	0.3871
	小外刈	13	11	0.2478
	内股	10	11	0.1102
	大内刈	13	12	0.4306
	引込返	7	4	0.0105*
	隅返	9	7	0.3518
その他	50	34		
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした

* P<0.05

** P<0.01

表8. 兩大会における施技様式の比較

階級群	組手状態	2008年	2009年	検定値
全体群	単発	247	170	0.0022**
	連続	32	15	0.2159
	変化	14	8	0.4065
	返し技	91	34	0.0035**
	総数	384	227	
軽量群	単発	127	71	0.3679
	連続	17	9	0.4748
	変化	5	6	0.1563
	返し技	50	22	0.1682
	総数	199	108	
重量群	単発	120	99	0.0001***
	連続	15	6	0.1399
	変化	9	2	
	返し技	41	12	0.0017**
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした

** P<0.01
*** P<0.001

表9. 両大会における前傾姿勢の比較

階級群	前傾姿勢	2008年	2009年	検定値
全体群	有	177	82	0.0067**
	無	207	145	
	総数	384	227	
軽量群	有	99	47	0.1379
	無	100	61	
	総数	199	108	
重量群	有	78	35	0.0106*
	無	107	84	
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした * P<0.05
** P<0.01

表10. 両大会における技方向の比較

階級群	技方向	2008年	2009年	検定値
全体群	同方向	302	169	0.1200
	逆方向	82	58	
	総数	384	227	
軽量群	同方向	155	75	0.1393
	逆方向	44	33	
	総数	199	108	
重量群	同方向	147	94	0.4609
	逆方向	38	25	
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした

表11. 両大会における組み手状態の比較

階級群	組み手状態	2008年	2009年	検定値
全体群	充分	191	144	0.0004***
	釣り手のみ	129	52	0.0019**
	引き手のみ	37	23	0.4214
	組際	27	8	0.0250*
	総数	384	227	
軽量群	充分	107	73	0.0079**
	釣り手のみ	60	24	0.0621
	引き手のみ	15	7	0.3632
	組際	17	4	
	総数	199	108	
重量群	充分	84	71	0.0070**
	釣り手のみ	69	28	0.0045**
	引き手のみ	22	16	0.3718
	組際	10	4	
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした

* P<0.05
 ** P<0.01
 *** P<0.001

表12. 両大会における釣り手位置の比較

階級群	釣り手位置	2008年	2009年	検定値
全体群	背部	66	27	0.0333*
	奥襟	17	14	0.1812
	横襟	7	6	0.2583
	前襟	96	65	0.1647
	反対側背部	13	7	0.4188
	反対側前襟	23	9	0.1268
	脚(膝上)	18	11	0.4647
	袖(上腕)	34	16	0.2094
	袖(前腕)	24	27	0.0114*
	帯	19	4	0.0667
	腋	29	16	0.4082
	反対側袖(上腕)	10	10	0.1281
	その他	28	15	
	総数	384	227	
軽量群	背部	32	10	0.0369*
	前襟	59	38	0.1623
	反対側前襟	8	5	0.4020
	腋	16	12	0.1959
	袖(上腕)	17	5	0.0834
	袖(前腕)	15	20	0.0043**
	その他	52	18	
	総数	199	108	
重量群	背部	34	17	0.1700
	奥襟	8	11	0.0532
	前襟	37	27	0.2891
	反対側背部	8	5	0.4794
	脚(膝上)	8	9	0.1277
	袖(上腕)	17	11	0.4936
	袖(前腕)	9	7	0.3518
	反対側袖(上腕)	5	6	0.1580
	その他	59	26	
		総数	185	119

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした

* P<0.05

** P<0.01

表13. 両大会における引き手位置の比較

階級群	引き手位置	2008年	2009年	検定値
全体群	背部	11	5	0.3063
	前襟	25	25	0.0313*
	無	14	6	0.2436
	脚(膝上)	123	50	0.0032**
	脚(膝下)	22	5	0.0110*
	袖(上腕)	13	19	0.0076**
	袖(前襟)	145	93	0.2167
	反対側袖(前腕)	8	7	0.2309
	反対側前襟	8	5	0.4591
	その他	15	12	
	総数	384	227	
軽量群	前襟	6	9	0.0344*
	脚(膝上)	68	27	0.0434*
	袖(上腕)	8	7	0.1852
	袖(前腕)	75	41	0.4811
	その他	42	24	
	総数	199	108	
重量群	前襟	19	16	0.2043
	脚(膝上)	55	23	0.0176*
	袖(上腕)	5	12	0.0070**
	袖(前腕)	70	52	0.1553
	その他	36	16	
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした

* P<0.05

** P<0.01

表14. 両大会における組み手主導権の比較

階級群	組み手主導権	2008年	2009年	検定値
全体群	有	156	124	0.0003***
	互角	182	83	0.0044**
	無	46	20	0.1243
	総数	384	227	
軽量群	有利	83	52	0.1393
	互角	88	42	0.1816
	無	28	14	0.4405
	総数	199	108	
重量群	有利	73	72	0.0001***
	互角	94	41	0.0021**
	無	18	6	0.0567
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした

** P<0.01

*** P<0.001

表15. 両大会における相手の釣り手位置の比較

階級群	釣り手位置	2008年	2009年	検定値
全体群	背部	67	31	0.1041
	奥襟	8	10	0.0660
	横襟	8	10	0.4870
	前襟	82	63	0.0381*
	無	85	48	0.3911
	腋	22	17	0.2008
	反対側背部	8	9	0.1022
	反対側前襟	18	7	0.1553
	袖(上腕)	24	13	0.3977
	袖(前腕)	27	11	0.1302
	その他	34	8	
	総数	383	227	
軽量群	背部	28	13	0.2990
	奥襟	5	8	0.0382*
	前襟	43	25	0.3875
	無	49	24	0.3082
	腋	12	8	0.3287
	袖(上腕)	11	5	0.3607
	袖(前腕)	14	10	0.2556
	その他	36	15	
	総数	198	108	
重量群	背部	39	18	0.0903
	前襟	39	38	0.0188*
	無	36	24	0.4400
	反対側背部	6	6	0.2260
	腋	10	9	0.2314
	その他	55	24	
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした

* P<0.05

表16. 両大会における相手の引き手位置の比較

階級群	引手位置	2008	2009	検定値
全体群	前襟	51	36	0.2038
	無	101	70	0.1279
	腋	5	6	0.1365
	脚(膝上)	37	6	0.0001***
	袖(上腕)	46	20	0.0514
	袖(前腕)	118	83	0.0799
	その他	24	6	
	総数	383	227	
軽量群	前襟	25	16	0.3048
	無	51	34	0.1524
	袖(上腕)	33	12	0.0678
	袖(前腕)	57	38	0.1329
	その他	32	8	
	総数	198	108	
重量群	前襟	26	20	0.2598
	無	50	36	0.2725
	袖(上腕)	13	8	0.4591
	袖(前腕)	61	45	0.1949
	その他	35	10	
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした *** P<0.001

表17. 両大会における相手の前傾姿勢の比較

階級群	前傾姿勢	2008年	2009年	検定値
全体群	有	152	84	0.0067**
	無	231	143	
	総数	383	227	
軽量群	有	76	48	0.1379
	無	122	60	
	総数	198	108	
重量群	有	76	36	0.0106*
	無	109	83	
	総数	185	119	

総数には不明を除く投技による取得ポイント数とした * P<0.05
** P<0.01

表18. 両大会における固技攻撃の比較

階級群	攻撃様式	2008年	2009年	検定値
全体群	上・攻	133	51	0.0013**
	上・回転	18	18	0.0522
	下・攻	11	5	0.3261
	無	265	170	0.0257*
	その他	2	2	
	総数	429	246	
軽量群	上・攻	59	15	0.0003***
	上・回転	8	14	0.0057**
	無	143	85	0.1106
	その他	12	6	
	総数	222	120	
重量群	上・攻	74	36	0.0847
	無	122	85	0.0571
	その他	11	5	
	総数	207	126	

総数には不明を除く表記以外の固技攻撃数を含む

* P<0.05
 ** P<0.01
 *** P<0.001

